


 巻頭言

病虫害の試験研究における 四国4県の連携について

徳島県立農林水産総合技術支援センター なか 中 の 野 あき 昭 お 雄



古事記には四国に関する記述として、「この島は身一つにして面四つあり」とある。続いて、「面ごとに名あり。伊予の国は愛比売（えひめ）といい、讃岐の国は飯依比古（いいよりひこ）といい、阿波の国は大宣都比売（おおげつひめ）といい、土佐の国は建依別（たけよりわけ）という」とある。つまり、8世紀の頃より四国の四つの国（現在の4県に通ずる）の県民性や風土等の違いが言い表されている。現代にいたって、農業生産の様相も多種多様で、それぞれ盛んな品目やその作型を異にする。それだけに病虫害関係では多くの問題を抱え、関係者は古くからその対策に腐心された。

四国植物防疫研究協議会は、昭和41年に定期刊行誌「四国植物防疫研究」が発刊された折の松林実当時会長によると、イネいもち病やメイチュウなどの病虫害に対する画期的な防除技術が開発されたのを契機に、昭和29年に地域の重要病虫害に必要な知識を交換し啓蒙し合い、より適切な防除策について協議する場として設立されたとある。その経緯等の詳細は本誌第76巻第4号（2022年）にある本協議会奈尾雅浩当時会長の巻頭言をご一読いただきたい。本稿ではその場が発展し、4県研究員が連携して取り組んだ研究事例を紹介する。

昭和45～49年度に農林水産省の総合助成試験事業で「ハスモンヨトウとネキリムシの生態と防除」に関する研究が取り組まれた。本研究では、両種害虫の生態的特性の究明、被害の査定と要防除密度の推定、防除手段とそれの適用方法の検討がなされた。その結果、ハスモンヨトウでは極めて低濃度な殺虫剤と土着天敵の働きとを組み合わせた防除体系を確立し、またネキリムシでは幼虫に対する病原性の高い細胞質多角体ウイルスを発見するなどの成果が出された。話はそれるが、小生は幸いにも学生時代の指導教官、中筋房夫当時教授が当時の研究メンバーであったことから、先生の講義でその取り組み内容をつぶさに拝聴することができた。先生がハスモンヨトウふ化幼虫の行動をかく乱させる殺虫剤の製造中止により、実用化されなくなったことを悔やまれていたことと検討会における4県研究員の白熱した議論の回顧が深く印象に残っている。

ハスモンヨトウについては、1980年代後半からメソミル剤に対する抵抗性が顕著になり問題化するようになった。それに対応するため、再び平成3～5年度まで同省の地域重要新技術開発促進事業で、課題名「殺虫剤抵抗性ハスモンヨトウの防除体系の確立」が4県（愛媛県

はオブザーバー参画）で取り組まれた。本研究では、4県における同虫のメソミル剤等に対する感受性低下の現状を把握するとともに、3県でフェロモンや天敵類等の殺虫剤に代わる防除技術の開発が検討された。小生はここでも幸いにも徳島県の研究担当者として、参画することができた。試験研究として最初に携わった研究課題であったことから、まだまだおぼつかなく、検討会等では3県の方々からいただいた意見やアドバイスから多くを学ばせていただいた。それらは後の試験研究を進めるうえでの糧になったことは言うまでもない。

その後、しばらくは4県が連携して取り組んだ研究課題はなかったと記憶するが、2006年に四国全域でミニキイロアザミウマが媒介するメロン黄化えそウイルスを病原とするキュウリ黄化えそ病の発生が確認されたのを契機に、平成19～21年度に同省の新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業で、課題名「2種生物資材の有効活用によるキュウリ黄化えそ病防除技術の開発」が、続いて平成22～24年度にも同事業でネギアザミウマが媒介するアイリス黄斑ウイルスを病原とするネギえそ条斑病を対象に課題名「四国4県連携によるIYSVの緊急防除対策技術」が取り組まれた。この課題の実施に当たっては、4県知事が研究連携協定書を締結し、四国のいずれかの県で新たな侵入病害虫に関する特殊報が出された場合等には、運営主体として組織した「四国4県連携侵入病害虫防除対策連絡会（以下、連携連絡会）」でそれら病害虫に対して「緊急防除技術の開発」の課題化の可否等を協議することとした。この会議はそれ以降、本協議会大会開催中に開催し、そこで新たに本県と香川県で発生したビワキジラミに対する防除対策等の課題化を検討し（後に課題化）、未発生2県への侵入警戒を促した。

以上のような四国4県で連携した試験研究の取り組みは、問題解決のほかに4県それぞれの研究資源を活用することで、研究員数の減少やベテラン研究員の異動、退職といった昨今の現状を補うことと前述したような小生の体験を若手研究員に同様にしてもらいたいとしている。現在、本協議会は近い将来に他組織との合併を検討しているが、新たな組織においても連携連絡会は継続して運営できればと考えており、また将来にわたって活用され、活発に議論されることを願っている。

（四国植物防疫研究協議会 会長）